

Sons and Lovers 論 ——得られない愛と越えられない兄——

法学部政治学科 4 年 K 組

30454348 鴨崎恵実

Sons and Lovers 論 —得られない愛と越えられない兄—

(章立て)

1. はじめに：*Sons and Lovers* は母子の話か

2. エディプス・コンプレクス再考

(1) 母を愛し、父を憎む

(2) ロレンスとエディプス

(3) フロイトの定義

(4) 前エディプス期——母子癒着——

3. 幼少期

(1) ポール

(2) ウィリアム

(3) 兄弟構成及びアニーとアーサー

4. 越えられない兄

(1) 生きている兄

(2) 死んでいる兄

5. まとめ

1. はじめに

Sons and Lovers というタイトルは、『息子と恋人』として和訳されることが多い。しかし、この和訳は文法や本文の内容に照らして必ずしも適切とは言いきれない。まずは、‘and’ の用法だ。それが「息子と恋人」なのか「息子であり恋人である」のかで意味が異なってくる。また ‘sons’、‘lovers’ のように複数形であることにも着目して、‘sons’ と ‘lovers’ がそれぞれ誰を指すのか、また誰にとってなのかと考えると何パターンもの意味を考えることができる。

表1

	Sons	and	Lovers	小説の中では
1	母にとっての息子たち	と	母にとっての恋人たち	息子と、母の元彼、夫、神父等
2	母にとっての息子たち	と	父にとっての恋人たち	息子と、Jerry 等父の坑夫仲間
3	母にとっての息子たち	と	息子たちの恋人たち	息子と、Lily, Miliam, Clara 等
4	母にとっての息子たち	であり	母にとっての恋人たちでもある	
5	母にとっての息子たち	であり	父にとっての恋人たちでもある	
6	母にとっての息子たち	であり	息子たちの恋人たちでもある(互いに恋人)	
7	父にとっての息子たち	と	母にとっての恋人たち	息子と、母の元彼、夫、神父等
8	父にとっての息子たち	と	父にとっての恋人たち	息子と、Jerry 等父の坑夫仲間
9	父にとっての息子たち	と	息子たちの恋人たち	息子と、Lily, Miliam, Clara 等
10	父にとっての息子たち	であり	母にとっての恋人たちでもある	
11	父にとっての息子たち	であり	父にとっての恋人たちでもある	
12	父にとっての息子たち	であり	息子たちの恋人たちでもある(互いに恋人)	
13	(母にとっての)息子たち	と	(母にとっての)恋人たち	幼少期の Paul & Arthur と、青年 William & 後の Paul

恐らく 4 番目が一番違和感のないテーマではないだろうか。ロレンス自身も 1912 年 11 月 19 日

付の手紙で、Sons and Lovers を編集者エドワード・ガーネットに説明する中で、‘as her sons

grow up she selects them as lovers’¹ (筆者注：主語は母親であるモレル夫人)と述べている。し

かし、メインテーマないしは最もわかりやすいテーマが4番目だとしても、表1のように整理する

ことによって様々なサブテーマの存在を把握することができる。² また、*Sons and Lovers* の前身

である *Paul Morel* という小説では、母と仲の良い神父や父の友人ジェリーがより多く登場してい

¹ James T. Boulton ed., *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, (Cambridge: Cambridge University Press, 1979) p.497.

² 1. 母ガートルードの家族以外との対人関係をみると、意外に多くの人々が登場している。‘lovers’ という観点から見てもその多さは変わらない。まずは、19歳のころ親密な関係にあったジョン・フィールド (p.16: ‘she preserved his bible, and kept his memory intact in her heart’) や23歳で結婚した夫ウォルター、またポールの God Father となったヒートン牧師。(p.44: ‘Mrs. Morel had a visit every day from the Congregational clergyman’. 彼は議論をしにやって来るのだが、ガートルードは彼を好み、彼は彼女を頼りにしている。この関係は、19歳のころの恋人ジョン・フィールドが後に40歳の女性を妻にしていることを思い出させる。また、突然帰宅したウォルターが不機嫌になりガートルードも早く帰ってこないで欲しいと思っていたことなどから、ヒートン牧師に恋人としての性格を見出すこともできる)。さらに、以上の三人のほかにも、市場での男たちとのやりとりを楽しむ様子や、ウォルターが怪我をして入院したときに会ったバーカーという男に対して ‘I do like him’ と感じたり、ミリアムの父に関して ‘if I were his wife’ といった発言をしたりしている様子が描かれている。

ガートルードは生協活動に参加するなどフェミニストとしての側面も持ち、男と同等の立場に立ちたいという願望は強いと読み取れる。したがって男との関係にそうした要素があることも確かだが、恋愛感情またはそれに近い感情が含まれていることもまた否定できない。夫ウォルターへの愛が冷めていく中で、ガートルードの愛の対象が息子たちと他の男たちに向けられていくという物語として読むことも可能だ。

3. は4. の次によく取り上げられているが、母親と息子とその恋人との関係である。ウィリアムを訪ねてきた少女に対して冷たい対応をしたり、彼がたくさんのラブレターを焼くときにはそれが読み上げられるのを聞いて楽しんだりもしている。しかし最もガートルードとウィリアムに深くかかわるのはリリーである。ウィリアムは「自分の死後三か月以内に自分を忘れるであろう」彼女と婚約する。ポールも工場で働く女たちと親しくするなど異性との関わりは多いが、ガートルードと関係してくるのはミリアムとクレアラである。この二人は「ガートルードの異なる二面をそれぞれ反映している」との考え方や、ミリアムは精神面、クレアラは肉体面を象徴しており、精神面で似ているミリアムに対してガートルードが非寛容になるとの考え方などがされている。

7. から 12. は、本作が父からの視点で語られることが極端に少ないことから中々表面には出てきづらいテーマではあるが、たとえば8. は父にとっての恋人として考えられるのはジェリーなどの男友達しか考えられない。ガートルードと異なり、ウォルターが妻以外の女性と対話している場面はほとんどない。ウォルターが恋人として男を選ぶのであれば、息子たちも当然その対象となりえたはずである。しかしながら、そのような描写はあまり見当たらず、むしろ息子たちとの距離を感じさせられる。したがってウォルターが息子を恋人のように愛せなかったことが強調される、または表面には描かれていない息子と父の愛について考えることができる。

13. は同じ息子の中でも恋人となる場合と息子のままである場合があるといった捉え方である。ウィリアムがそばを離れてしまったのでポールへの愛が増えたことは明らかである。本作の中ではアーサーは恋人としての役を果たしていないが、もしもポールもウィリアムに続いて亡くなったとすれば、アーサーもまた恋人となるだろう。息子全員が同時に恋人になることはないのである。

ることも参考になるだろう。橋本宏氏は「息子」と「恋人」は同一人物と見られるので『恋しい息子たち』あるいは『恋息子』とすべきだという考え方に触れた上で「家庭内では「息子」だが、いったん外に出れば「恋人」、すなわち異性を愛する一個の男性として振る舞うべき存在である。しかしこの小説では、その対応がうまくいかないことを示しているのだ」³と述べている。このように *Sons and Lovers* という題名から様々なテーマを読み取ることができるが、これを『恋しい息子たち』と訳す井上義夫氏も又、「オイデプス・コンプレクスの一具体例として『恋しい息子たち』を語ることにすくなく疑問を抱いてきた」⁴という。本論も、まずはエディプス・コンプレクスや母子関係と関連させて作品を捉えながらも、そのテーマを精査することによって逆にエディプス・コンプレクスでは理解できない部分を明らかにして、井上氏とは別の方向からエディプス・コンプレクスを超えた作品としてロレンスの小説を考えていきたい。

(尚、*Sons and Lovers* からの引用は全て Cambridge University Press のロレンス全集の版に基づき Penguin 版を使用した。また、以下 *SL* と略記する。)

2. エディプス・コンプレクス再考

(1) 母を愛し、父を憎む

Sons and Lovers の作品紹介や解説などを読むと「エディプス」という言葉が出て来ることが非常に多い。たとえば、倉持氏は「この作品においては、夫との関係に失望した夫人は、その愛を子

³ 橋本宏『ロレンス研究—その生涯と作品』、東京：鳳書房、2000、p.293。

⁴ 井上義夫『ロレンス 存在の闇』、東京：小沢書店、1983、p.47。

供たちに向けるというのである。そのため、母親と息子との関係が「イーディパス・コンプレックス」と言われる関係になるというのである」と説明する⁵。テリー・イーグルトンも「奥深いところでは、エディプス的な小説であると確かに言えるからである。母親と同じベッドに寝ていた幼いころのポール・モレルは、恋人に抱くのと同じ優しさをもって母親をいたわり、父親に対しては激しい敵意を感じた」⁶と論じている。

確かに、「母を愛し、父を憎む」という場面は、本作中に多く登場する。たとえば“‘Lord, let my father die,’ he[Paul] prayed very often’ (p.85) や ‘Paul loved to sleep with his mother’ (p.92)、またモレル夫人が死んだ時 ‘He[Paul] kneeled down and put his face to hers and his arms round her: ‘My love—my love –Oh my love!’ he whispered again and again.’ (p.442) といった文はよく引用される個所である。

したがって、もしも単純に「母を愛し、父を憎む」ということがエディプス・コンプレックスであるならば、なるほど *Sons and Lovers* はエディプス・コンプレックスのテーマを多分に含んだ小説であることに間違いない。

(2) ロレンスとエディプス

ロレンスがエディプス・コンプレックスから影響を受けたかどうかについては様々に論じられてい

⁵ 倉持三郎『D. H. ロレンス』、東京：英潮社新社株式会社、1977、p.149。

⁶ テリー・イーグルトン「精神分析」、ピーター・ウィドーソン編、『ポスト・モダンの D. H. ロレンス』、吉村宏一訳、東京：松柏社、1997、p.127。

る。田中實氏は「この作品を執筆したころ、ロレンスはフロイトの『夢の解釈』は読んでいなかったが、女友達のジェシー・チェインバーズがフロイトのことを知っていたので、彼女から精神分析についての知識を得ていた。したがって『息子と恋人』中のガードルードとポールの関係、母子以上の恋人以上とも思える関係についてのヒントには、間接的にフロイトの影響があったことは否めない。」⁷ と述べる。他にも、フリーダがフロイトの弟子であったオットー・ラングと親密な関係にあった後にロレンスと出会ったため、彼女からエディプス・コンプレクスについても聞いていただろう、とする記述は良く見られる。しかし、ロレンスがフリーダと出会った 1912 年 3 月の始め頃には *Sons and Lovers* の前身である小説：ポール モレルの第三稿を書き上げようとしていた。これをまた全て始めから書き直して *Sons and Lovers* となるのだが、それは 1912 年 7 月中旬に編集者であるエドワード・ガーネットからのコメントに従ったためだと考えられる。藤原弘一氏も 1912 年 11 月 14 日付けのガーネット宛ての手紙に触れ、「ここに述べられている筋書きは Oedipus Complex の公式のようなところもあり、ロレンスが Edward Garnett から作品が form を持つことを強要されたこと、この半年ばかりの間に、Frieda から Freud の学説についての知識を得ていた事が元で、作品がある程度 Oedipus Complex の pattern を意識しながら手直しされていたであろうことをうかがわせる」。しかし「その pattern はもともと草稿にはあったもので、その pattern を明確に出すため mother-son relationship が多少強調される程度の手直しにすぎなかったであろう」と述べている。⁸ また、橋本宏氏も同様の見解を述べている。⁹

⁷ 田中實『ロレンス文学の愛と性』東京：鳳書房、2003、p.33。

⁸ 藤原弘一『D. H. ロレンス実証的研究一』、大阪：大阪教育図書、2007、p.7。

⁹ 橋本宏『ロレンス研究一その生涯と作品』、東京：鳳書房、2000、p.273。

さらにフロイトが提唱したエディプス・コンプレクスはギリシア悲劇のエディプス王がモデルとなっているが、ロレンスもまた、ソフォクレスのエディプスに感激している。母が死んでから3ヶ月もたっていない1911年3月3日に当時婚約中であったルイ・バローズに向けての手紙にはこう書かれている。

“When I get sore, I always fly to the Greek tragedies: they make one feel sufficiently fatalistic. I’m doing *Oedipus Tyrannus* just now – Sophocles. I wish with all my heart I read Greek. These Greek tragedies make one quiet and indifferent. They are very grand, even in translation.”¹⁰

また、同年4月26日にはサリー・ホプキンへの手紙の中で ‘Oedipus is the finest drama of *all times*’ (emphasis in the original)¹¹ と書いている。つまり、ロレンスはフロイトのエディプス・コンプレクス以前に、フロイトも啓発されたギリシア悲劇の「エディプス王」に深い感銘を受けていることは確かである。

さらに、ジョン・ワーゼンは、*Sons and Lovers* の Introduction の中で、1913年3月にロレンスがガーネットに送った手紙に触れ、¹² ロレンスが *Sons and Lovers* を「*Hamlet* や *Oedipus* に続

¹⁰ James T. Boulton, ed., *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, Cambridge: Cambridge University press, 1979, p.234.

¹¹ Ibid., 261.

¹² (James T. Boulton, ed.,) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. I, (Cambridge: Cambridge University press, 1979), p.546: ‘if *Hamlet* and *Oedipus* were published now, they wouldn’t sell more than 100 copies, unless they were pushed.’

く現代の母子関係の悲劇と見なしていたようだ」と述べている。¹³ 一方で、フロイトも『精神分析入門』の中で エディプス・コンプレクスと関連させて「コンプレクスに対する反応において一個のハムレットになったことを示しています」として両者を並べて書いている。¹⁴ ギリシア悲劇の同じ作品に注目していたのだから、結果的にロレンスの書いたものがフロイトの論じたエディプス・コンプレクスと近いものであっても不思議ではない。

したがって前述した藤原弘一氏の考えのように、もともとエディプス・コンプレクス共通するものを持っていた筋書きをガーネットから **form** を持つように強要され、フリーダから得た知識をもとにエディプス・コンプレクスのパターンを意識しながら手直ししたと考えるのは自然である。しかしながら、後からの非自発的な修正であったために、本文中にはフロイトのエディプス・コンプレクスをそのまま適用するにはおさまりきらない部分が確かに存在しており、そこに意図せずして表れたロレンスの本当の気持ちや、*Sons and Lovers* の新たな魅力を見出すことが出来る。

(3) フロイトの定義

フロイトはエディプス・コンプレクスを以下のように定義している。

「息子はすでに幼児時代から、自分のものと見なす母親に対して特別な愛情を示し始め、父親を、自分と母親の独占を争う競争相手と感じはじめます。・・・(中略)・・・こうした態度

¹³ *Sons and Lovers*, Introduction p. xvii

¹⁴ フロイト『精神分析入門』菊盛英夫訳、東京：河出書房新社発行、1972、p.252。

のことを、われわれはエディプス・コンプレックスと称しています」(強調は原文のまま) ¹⁵

しかし、ここで大きな疑問が生じる。ポールは父親を「母親の独占を争う競争相手」と感じていたのだろうか。例えばポールが肺炎にかかって寝込んでいる場面で見舞いに来た父にポールは母親が来てくれるかとばかり聞く。そのような場面で父、ウォルターの反応は以下の通りである。

‘He[Walter] felt his son did not want him. Then he went to the top of the stairs and said to his wife: “This child’s axin’ for thee—how long art goin’ to be?” (p.93) 息子が自分を邪魔だと感じれば、すぐにそれを察知して、去る。また、モレル夫人の夫への愛はポールが生まれてからも冷めていく一方であり、夫婦の愛情を語る場面があっても、母子間よりも優先されるような場面は第5章の冒頭部、ウォルターが炭鉱で怪我をした場面ぐらいしかない。

夫の怪我を知って慌てふためくモレル夫人に対して、ポールは落ち着き払ってお茶を飲むことを強く勧める。これは、父の怪我ぐらいで慌てふためかないで欲しいという気持ちとも読み取れる。しかし、その後、病院へ向かった母の後ろ姿を見つめる場面で ‘his heart ached for her, that she was thrust forward again into pain and trouble.’ (p.110) とある。もちろん、全ての感情が書かれるわけではなく、むしろ本当の感情は書かれないことの方が多いだろうが、少なくとも嫉妬だけではなく、母が苦しい場面では自分も苦しく感じる、といった母の感情をそのまま自分のものにしてしまう心理があることも確かだ。

以上の内容から、ポールにとっての父に母との関係を邪魔するライバルとしての要素は少なく、

¹⁵ Ibid. , p.155.

エディプス・コンプレクスにおける父親としてのフロイトの定義には必ずしもあてはまらない。むしろ、母の感情がそのまま自分の感情になってしまうほど、父が介入してくる以前の母子関係において適切な距離を抱けていないと考えられる。つまり、問題はエディプス期以前にあるのだ。また、それでもポールと母親との密接な関係からポールがエディプス・コンプレクスを抱いていると仮定するのならば、本来父である競争相手はウォルター・モレルの他にいることが想定されるが、これについては4章で考察するとして、ここでは先にエディプス期以前の母子関係から述べていく。

(4) 前エディプス期 ——母子癒着——

エディプス・コンプレクスのきっかけとなる父親の登場を阻む、母子癒着についての例では「息子の出世への強い期待と、母親の期待に沿おうとする息子の姿勢——母親の期待には、夫によって与えられた失望を、息子によって穴埋めしようとする傾向、息子を夫代わりにしようとする傾向がみられるし、息子の姿勢には、そのような母に媚びて、幼児的な結合関係を維持しようとする傾向がみられる」¹⁶とある。ここでの母子の姿は、*Sons and Lovers* において、ロレンスが少なくとも表面的には意図して描いたであろうモレル夫人とウィリアム、ポールの姿と容易に重ねることができる。また、ジュディス・ラダーマンが、「ロレンス自身の母の執着と性器以前の母と子の関係がロレンスの関心の中心であり、それが広く知られている異性愛、性器愛の関係よりも大切である」と述べ、さらに「ロレンスの作品は彼のキャリアを一貫して、……エディプスに覆われた

¹⁶木村栄、馬場謙一『母子癒着』、東京：有斐閣、1988、p.31。

下の、未解決のエディプス以前の葛藤の証拠を示している」¹⁷ と述べていることから、*Sons and Lovers* の問題をエディプス期以前に求めることは的外れではないだろう。

それでは、ポールのエディプス期以前の問題とは一体何であろうか。『乳幼児心理学』からフロイトの心理学的発達段階を参考にすると、口唇期はおおよそ1歳まで、肛門期は、おおよそ3歳まで、性器期はおおよそ4歳まで、そして潜在期がおおよそ13歳までとある。¹⁸ 個人差も考慮しながら、ポールの13歳までが描かれた第4章までを検討していくと、2つの事が重要だと思われる。

1つは、両親——特に母親——の関心が、兄のウィリアムや夫婦関係などにあり、Paulには十分に注がれていないのではないか、という点である。たとえば、4章になるとポールの記述が増えるが、それはウィリアムがロンドンへ発ったのでようやく順番が回ってきたといった感じで、ここに至って初めてポールの幼少期について語られる印象を受ける。また、1～3章までは73ページあるが、ポールに関する記述は7分の1ほどにすぎない。

2つめは、母がポールに対して抱く感情が非常に複雑に描かれているという点である。

次章では、まずポールが13歳になるまでの第1章から第4章のポールに関する記述を整理して、母がポールに抱く感情を把握した上で、ウィリアムや他の兄弟との比較をしながらポールに特有の性質があればそれを明らかにする。

3. 幼少期

¹⁷ Judith Ruderman, *D. H. Lawrence and the Devouring Mother*, (Durham, N.C.: Duke University Press, 1984), pp. 8-11

¹⁸ 『幼児心理学』第2章 p.28

(1) ポール

まず、第1章では胎児であるポールの記述は二箇所あり、どちらも夜で、母親の気持ちが書かれている。一箇所目の祭りの夜、子供達が眠り、夫の帰りを待っている場面では、‘she felt wretched with the coming child……She could not afford to have this third. She did not want it.’とあり、さらに酒場にいる夫を思い、‘This coming child was too much for her.’ (p.13)と話者が続ける。つまり、母親はポールの誕生を望んでいなかったという描写である。しかしながら、この祭りは出産一ヶ月前の時期であり、出産を目前に控えた妊婦の気持ちが不安定になりやすいことも充分に考えられるという点も考慮すべきだ。二箇所目は、夫に追い出された月夜の場面である。‘(She) trembling in every limb, while the child boiled within her.’や‘the child too melted with her in the mixing-pot of moonlight’ (pp. 33-34)といった描写はよく取り上げられるが、山口哲生氏は「あたかもおなかの子が、夫モレルによってではなく、月光と花粉によって受胎されたかのよう」¹⁹だと述べている。夫との気持ちの隔たりとその一方で子供との一体感を味わう場面として象徴的である。

第2章では、ポールの出産と他に、主に二箇所の場面がある。出産の場面では、母と父のそれぞれ、また二人の関係についての描写が多い。遅くまで仕事をしたため ‘The fact that his wife was ill, that he had another boy, was nothing to him at that moment’ (p.43)という父の描写は二人の関係が冷め切っているかのような印象を与える。しかし、真面目な性格とはいえ、出産時にも夫の世話を細かく指示するモレル夫人の姿や、赤ん坊を前にしたぎこちない会話の後に ‘he

¹⁹ 山口哲生『D・H・ロレンスにおける<母>』、東京：鷹書房弓プレス、1989、p.3。

wanted to kiss her, but he dared not. She half wanted him to kiss her, but could not bring herself to give any signs.’ (pp. 43-44) とあり、表現しきれないにしろお互いを愛する気持ちが存在することも示している。また 2 章の冒頭部では、ベッドで休んでいる妻に紅茶を運び、‘He loved her to grumble at him in this manner’ (p. 38) という父の姿も書かれている。

そうした、愛情の含みもすぐ後でことごとく否定される。‘Mrs. Morel had hated her husband during the year before it[Paul] was born.’ (p. 49) であつたり、暴れる夫に嫌気が差して、アニーと赤ん坊を連れてクリケットグラウンドに座っている場面の ‘She no longer loved her husband; she had not wanted this child to come.’ (p. 51) などだ。ここで注目すべきなのは、この考えがポールによって引き出されたことである。赤ん坊の深い青い目が ‘seemed to draw her innermost thoughts out of her.’ と直前に書かれており、ポールの誕生によって母は夫への愛情を完全に見限ったと捉えることができる。ここで思い出すべきなのは、エディプス・コンプレクスは父親を自分と母親の独占を争う競争相手と感ずることから始まるということだ。ポールにとっての父親が、0 歳の時点ですでに夫を愛していないと認識した母親の愛を争う相手であったとは、とても考えにくい。

さらに、これらが語られている夕暮れの場面 (pp. 50-51) は、ポールと名付けられる場面でもあり、彼に対する母親の感情が多く語られる場面である。‘She had dreaded this baby like a catastrophe, because of her feeling for her husband.’ ここで出てくる ‘dreaded’ という感情が夫への感情を愛の冷めかけた、あるいは憎しみや軽蔑のまざったものだと仮定すると、本来であればそのような母親から生まれてきた子供の方が母に対して恐れを抱いて当然である。それを逆に自

分の感情であるかのように感じ、さらに恐らく子供から非難されることに対する恐れがそこにあると考えられる。だからこそ ‘Was there a reproach in the look?’ などと考えて ‘She felt the marrow melt in her bones, with fear, and pain.’ となる。そして思わず赤ん坊を太陽へと差し出すのだ。この場面は、自分が傷つけた、あるいは非難されて当然の対象を憎み、さらに壊してしまいたいという感情の描写と捉えられ、類似のエピソードを他の箇所から見つけることができる。その1つが、引出しを投げ飛ばして妻の額に怪我を負わせたウォルターだ。 ‘Having hurt her, he hated her.’ (p. 57) もう1つが、ポールが姉の人形を火あぶりにする場面だ。 ‘He seemed to hate the doll so intensely, because he had broken it.’ (p.83) こうした感情は恐らく人間の自然な感情のひとつであって、それを描き出すロレンスの洞察が見事であると同時に、両親ともに持っていたそうした感情をポールも間違いなく引き継いでいることの表れと読むこともできる。

そして、そのような恐れとともに母親が抱いているのが、罪の意識である。赤ん坊を見るうちに突然重苦しい感情が激情的な悲嘆となって “My lamb!” と叫んだ後、 ‘she felt ……she and her husband were guilty.’ とある。実は、ポールに関する最初の記述からこの台詞に至るまで 母親がポール本人に呼びかけたことはなかった。さらに出産直後に愛情が湧いてくるという文こそあれ、それまでの多くの記述は夫やウィリアムへの意識が強い、あるいは第3子を出産することに対する苦悩ばかり強調された文であり、ポール自身に対する感情は生々しい不安しかなかった。出産直後も ‘The thought of being the mother of men was warming to her heart.’ とあり、 ‘men’ と複数形であることから、ポール個人への愛が描かれているわけではない。初めてポール自身へ意識を向かわせた直後に、初めて罪の意識を感じたのだ。

非難されることを恐れていた時は、自分のことばかり考えていたために気がつかなかったが、子供自身へと意識を向けたときに初めて、罪の意識を感じる。そして、‘With all her force, with all her soul she would make up to it for having brought it into the world unloved’ (p.51 するのだ。ここで母の子供への感情の土台となる部分が「償い」であることが明らかになるのである。

第2章ではこの後ウォルターが投げた引出しがモレル夫人の額にあたり、その血が子供の髪へと滴る場面があり、「血の同盟」²⁰などと表現される。しかし、ただ母子のつながりを象徴するだけでなく、聖書に精通したロレンスのこと、この血に罪の贖いや、契約の血としてのニュアンスが込められている可能性も高いのではないだろうか。

第3章に入ると間もなく第4子アーサーが生まれる。アーサーとは17ヶ月離れているので、このときポールは1歳と5ヶ月である。ポールへの授乳がいつまで行なわれていたのかは不明だが、早いうちにやめていたとしても、授乳が終わってから間もなくアーサーが生まれたと考えられる。フロイトは、こういった事実は幼児が無意識のうちに母親へ抱く非難へと結びつくとして述べている。そして「幼児はいわば『悪く』なり、怒りっぽくなり、言う事を聞かなく」なるという。²¹すると本文でもアーサーの誕生直後にポールの‘fits of depression’について書かれている。この‘depression’という単語は精神医学との関連性を考えさせる。この発作が起きているのは3-4歳と書かれており、フロイトの性心理的発達段階では男根期にあたるはずだが、アーサーの誕生とそれを中心に幸せそうな夫婦の描写が直前にあったことから、この発作は男根期よりも前の段階に

²⁰ 山口哲生『D・H・ロレンスにおける<母>』、東京：鷹書房弓プレス、1989、p.4。

²¹ フロイト『精神分析入門（下）』高橋義孝・下坂幸三訳、東京：新潮社、1977、pp. 386-387。

原因があると考えられる。しかも、当時のロレンスがそこまで詳細にフロイトの性心理的発達段階を知っていて、それを意図したとは考えづらく、仮に前述したようにガーネットによって第4稿の形式を整える際にエディプス・コンプレックスのパターンを意識して手直したのが事実だとしても、ここまでは気がつかなかった可能性は大いにある。すなわち、ここにポールの問題がエディプス期以前に起こっているという作品本来の姿が残存しているのではないだろうか。また、そうであれば、ここでウォルターが “If he doesn't stop I'll smack him till he does.” (p. 64) と脅しつけても、ポール自身がエディプス・コンプレックスのきっかけに反応できる状態になれていないと考えられる。

第3章ではこの後、ウィリアムに関する記述が大部分を占め、彼のエピソードの一部として、10歳と13歳のポールが少し登場するに留まっている。ポールの問題は未解決のままだ。

第4章に入り、その間を埋めるかのようにポールの描写が増えるが、どれもあまり明るい話題ではない。冒頭部の人形を火あぶりにする場面——引越しをする前にあり、ウィリアムが大きくなった時に引越しをしたので、彼が生協で職をもらった13歳前後のことであると推測できる。すなわち、ポールが6歳頃のエピソード——、父の死を祈る場面。しかし、その後、それまで暗かったポールの記述が父との手仕事の場面で突然明るくなる。母子関係や母親を中心にした家庭における暗さと母を抜きにした父との交流の明るさは、こうして書き出さないとなかなか明確に捉える事はできない。そして、病気で母に看病してもらい、また元気な時はブラックベリーを母にプレゼントするなどの場面の後に、ついに ‘the mother made a companion of Paul’ (p.93) となる。しかし、これはウィリアムがノッティンガムで仕事をしているために在宅時間が少なくなったためだと書かれている。つまり母親の関心は、ポールが病気になったりプレゼントをしたりすることよりも、

ウィリアムがいなくなったことによってやっとポールに向けられるようになったのだ。——実際、ポールが気管支炎で喉をひゅうひゅう言わせていたときには ‘rose in her heart the old, almost weary feeling towards him’ (p.90) とある。「古く、殆どうんざりするような感情」は、子供を重荷に思っていた第2章で述べた感情であり、ポールの病気は母にとって重荷でしかないことが示されている——。父との関係は問題がなく、母との関係における不安や満たされない思いがそれまでのポールの暗さの原因と考えても良いのではないか。そうすると、気管支炎にかかったポールが母のアイロンをかける姿をみて思った ‘she had never had her life’s fulfillment: and his own incapability to make up to her hurt him with a sense of impotence.’ (p.91) という文はこう書き換えることが可能だ。‘he had never had his life’s fulfillment (= 母からの自然な愛): and his own incapability to make up his hurt him with a sense of impotence’。このように、自分のことを母に投影しているとも考えられる。また、‘impotence’ という単語も性的不能という意味を持つ。性器、つまり男根が機能しないということから、男根に意識がいく前、つまりやはり、前性器期に意識が留まっているという意味をも見出す事ができるのではないだろうか。

(2) ウィリアム

ポールの問題が明らかになったところで、比較のために兄ウィリアムをとりあげる。初稿ではガーネットによって削除されていた部分も含めると、ウィリアムに関する記述はかなり多い。また第1部はウィリアムの誕生から死までを描いており、第2部は次男のポールの人生に本格的に

焦点があてられる。小説の題名が‘sons’と複数形であることから、ウィリアムは第2の主人公と考えると差し支えないだろう。ジョン・ワーゼンは章立ての建築的な対称性について言及しているが、²² 彼が触れていないことの一つとして、第1部でウィリアムは死んでこの小説から去り、第2部ではポールがこの小説から去ることも挙げられるだろう。2人とも若く、また恋人を伴わずに読者の前から姿を消す。

また、本編の序言でジョン・ワーゼンは次のように述べている。‘in the final version he is an important role model for Paul. After William’s death, Paul’s relationship with their mother echoes his brother’s in many respects.’²³ 実際に両者の類似点は多い。母親との親密さや、自分の恋人に対して母親がとる冷たさ、父との喧嘩のきっかけがあっても必ず母によって止められる点²⁴ などが容易に挙げることができる。職を得るのが生協であることや、異性に人気があるところも同様だ。両者の相違点は、ウィリアムが母の元から離れてどんどん出世していくのに対し、ポールは母の元に留まり、出世ではなく絵を描く事の方が好きであることがまず挙げられるだろう。それでは、ウィリアムの幼少期においてはどうかだろうか。

ウィリアムが生まれるのは結婚1年目である。‘for three months she was perfectly happy: for six months she was very happy.’ (p.19) とあり、妊娠5ヶ月目で自分の住んでいる家が義母のものとなって夫への信頼を失うものの、幸せな時期の妊娠であることは確かだ。夫といっても孤独を感じるだけと繰り返し強調されるが、そこに苦悩はない。そして、‘Mrs. Morel despised her husband, she turned to the child’ (p.22)とある。父親は赤ん坊を殴ることもあったが、1歳のウ

²² *SL*, Introduction p. xix

²³ *SL*, Introduction p. xxii

²⁴ *SL*, ウィリアムは p.83 で、ポールは p.253 で父と喧嘩をしている。

ウィリアムは父のことを好いている。そしてウォルターがウィリアムの髪を切ってしまう場面やウィリアムの就職に関する場面で、夫婦間で取り合いのような喧嘩が起きる。ウィリアムの誕生直後に妻が赤ん坊ばかり構うことに夫は嫉妬もしており、ウィリアムという息子に関しては息子と両親の三人がきちんと関係し合っていることがわかる。これに対して、ポールの場合は父が接するのは病気の場面ぐらいであり、その場面でも簡単に母と交代してしまっていた。また、ポールが賞をとってもあまり関心を示さず、就職に関しても口を挟んだ様子はない。

母はウィリアムのことを情熱的に愛しており、ポールへの愛とは種類が違うことはロレンスも認識していることである。‘Mrs. Morel’s intimacy with her second son was more subtle and fine, perhaps not so passionate as with her eldest.’ (p.93) 前項でも述べたように母からポールへの愛は、償いの意味合いが強かったが、ウィリアムに対してはそういった複雑な感情はない——もちろん夫に向けるはずの愛情や寂しさから、多少愛情が強すぎるきらいがあるが——。ウィリアムはポールと異なり母からの愛情に対して飢餓感は少なかったと思われる。

ウィリアムとポールとの違いは明らかになったので、さらに両者の関係について論じていきたいが、ここでは比較にとどめ、4章で詳しく述べていきたいと思う。次の項では、他の兄弟、すなわちアニーとアーサーについて簡単に整理する。

(3) 兄弟構成およびアニーとアーサー

Sons and Lovers はロレンスの実生活がモデルになっていると言われるが、ジョン・ワー

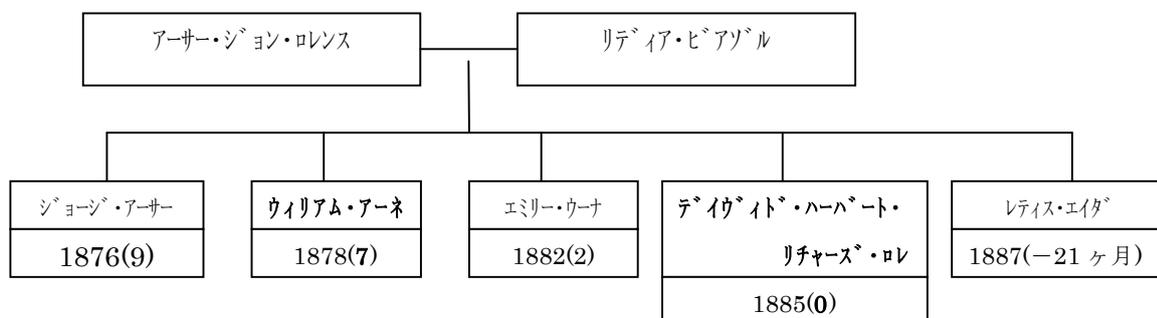
ゼンも言うように ‘The many differences have been ignored.’²⁵ 例えば、ロレンスの兄弟は本人を含めて5人だが、*Sons and Lovers* に出てくる兄弟は4人である。下図に整理したように、微妙な変更が多くなされており、変更されていないのはウィリアムの名前と年齢差、そして彼と作者ロレンスとの間に姉が1人いること、そしてすぐ下に歳の近い兄弟がいるという3箇所だけである。キース・ブラウン氏はこれらの差異によると考えられる本作中の違和感について述べ、「ロレンスは記憶をもとに客観的に創作しようとしないので」、このような違和感が生じるのだ、と一蹴している。²⁶ しかし、たとえ違和感が生じたとしても、それならば何故、そのような危険をおかしてまで現実から変える必要があったのだろうか。そして、逆に現実と変更しなかった部分の意味とはなんだろうか、と考える余地はある。

²⁵ *SL*, Introduction, p. xvi.

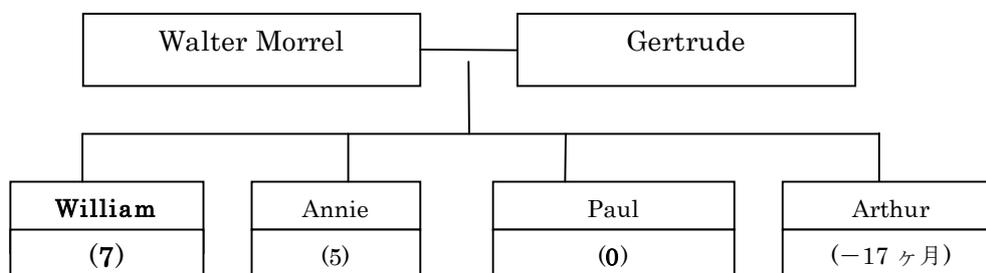
²⁶ キース・ブラウン『D.H.ロレンス批評地図』吉村宏一ほか訳（引用部分は吹上ナオ子訳）、東京：松柏社、2001、pp.55-61。

表 2²⁷ :

Lawrence



Paul



まず、第1に考えられるのは兄ウィリアムの存在はロレンスにとって何かしらの意味で重要だったため、自身をモデルとしたポールにとっても欠かすことのできない要素となったということだ。

第2に注目すべきなのはアニーの存在で、彼女はその名前及び作中での性格などからエミリーとエイダをアニーという一人の人物に集約していると考えられる。²⁸ これによって3男2女だった兄弟が3男1女に変わり、女子の比率が減り、‘sons’が強調される。さらに、第1章ではウィリアムが、第2章でポール、第3章ではアーサーが誕生するのだが、アニーに関しては一切誕生の記述

²⁷ John Worthen『若き日のD・H・ロレンス ケンブリッジ版評伝』、東京:彩流社、1997、pp.458-459などを参考に作成

²⁸ 根拠はないが、言葉の響きを楽しんでいたロレンスのことである。次のように言葉遊びをした可能性もあるのではないだろうか: Emilyの頭文字をAdaの頭文字に変えるとAmilyとなる。二文字目のmをn2個に置き換えるとAnnilyとなる。最後にyをeに変えるとAnnieという一般的な女子の名に変わる。

がない。また、それ以外のアニーに関する記述も極端に少なく、第2章までは母に連れられてどこかへゆくという文は数箇所あるものの、それ以上の記述は母のアニーへの感情も含めてほとんどないと言って良い。第3章では「子供たち」として語られるばかりである。

最後に歳に近い兄弟がすぐ下にいる、ということも重要な要素だったと考えられる。まず、ポールについて詳細に検討した項で触れた通り、自分が与えられなくなった直後に新たな赤ん坊が母から授乳していることにより、母の乳房を奪われたというショックと嫉妬を容易に抱いたと考えられる。この感情はウィリアムに対してそうであったように実際にロレンスが感じた感情であったかもしれない。さらに、アーサーが生まれるのは両親が束の間の愛を取り戻したからであり、ポールの誕生時とは違い愛によって授かった子であるということが示されている。また、アーサーを囲む両親は幸せそうに描かれている。これらのことから考えられるのは、ポールはアーサーに対して嫉妬を覚えたり、自分と比較したりしてもおかしくないはずである。それにも関わらず、そういった記述はアーサーが軍隊に加入した時ぐらいしかない。“Are you fearfully fond of him?” “Because they say a woman always likes the youngest best.” (p.218) 母に尋ねるポールは落ち着かず、いらいらしている。この場面以外に当然あると考えられるアーサーへの嫉妬は、ウィリアムが生きていたときは主にウィリアムに向けられ、死後は自分が母親のそばをぴたりと離れずにいた一方でアーサーは家の外にいることが多かったことで、表に出てこなかっただけであろう。

4. 越えられない兄

前章で述べてきたようにポールはウィリアムやアーサーに比べ、母親からの純粋な愛に飢えていた。償いではなく愛が欲しいと感じるポールだからこそ、‘trotted after his mother like her shadow’ (p.64)とあるように母のそばを離れられないのである。それゆえ、‘He was so conscious of what other people felt, particularly his mother. When she fretted, he understood, and could have no peace’ (p.82)と書かれるように母親の感情に敏感になるのも当然である。そこに僅かでも自分への愛を見出したかったのではないだろうか。

しかし、母親が一心に愛しているのは兄のウィリアムであった。彼の死後でさえ、何かにつけ、ポールと関連させて母はウィリアムを思い出していた。幼少期におけるポールについては詳細に見てきたので、当時ポールがウィリアムに対してどのような感情を抱いていたのかを考察する。

(1) 生きている兄

ウィリアムはポールが生まれたときは7歳であった。‘Already William was a lover’ (p.44) と書かれ、そして赤ん坊に対して嫉妬心を見せる。その一方で赤ん坊をあやしている場面も描かれている。(p.48)

ポールが友達と遊ぶような年頃になったときには ‘William was too far removed from him to accept him as a companion.’ (p.82) とあり、ポールが物心ついた時から歳の差を感じずにはいられなかったことが推測できる。これはダンスなどを覚えたウィリアムがポールに女の子たちの話を聞かせる場面 (p.73) や、ダンス用の服が届いたときにはポールに手伝わせて着ている場面からも、ポールは知らない世界をウィリアムから取り入れており、同時にこれらの場面(p.76) はウィリアムが17～18歳でポールが10～11歳の頃であるから、憧れても自分にとっては手の届かない世

界をウィリアムが楽しんでいる姿を常に目の当たりにしてきたと考えられる。なお、ダンスに関して言及するならば、父親のウォルターがダンスの名手であり、また母親は全く踊れないことから、2人の息子が仲良くしている場面に父親の趣味であったダンスが関係していることは意味深い。母親をめぐって嫉妬していた両者が母親のいないところでは仲良くしている、とも読めるし、また両者に流れる父親の血が2人を結びつけると読むこともできる。特にウィリアムが衣装を着る場面では、ウィリアムが下半身の話ばかりポールにするので、性的な含みを読み取れてしまうほど仲の良さをうかがわせている。

母親は知らなくて、父親が好きだったダンスの世界をポールは兄から教わった、と捉えると、ポールに新しい世界を紹介していく役割をウィリアムが担っていると考えられる。すると、ロンドンへと旅立つウィリアムがラブレターの挿絵をポールに与える場面も、ポールの絵描きとしての心を刺激していると捉えられる。(p.79)

このように、ウィリアムは常に一歩先を行きながらポールとも親しくし、新しい世界を教えていたが、もちろん嫉妬もしている。彼がノッティンガムに行ってしまうと母がポールと仲良くなると

‘The Latter[Paul] was unconsciously jealous of his brother, and William was jealous of him. At the same time, they were good friends.’ (p.93) という記述も出てくる。

このとき、ポールとウィリアムは表面的には母の愛を巡って競争しているが、前述したように母からポールへの愛はウィリアムへの愛とは異なって償いから生じたものであるために、ポールはウィリアムに決して勝つことはできない。ここでエディプス・コンプレクスを思い出すと、父を母の愛を独占するライバルとみなし、それに勝てそうにないから葛藤するという側面があった。したが

って *Sons and Lovers* で、エディプス・コンプレクスを語るとすれば、父の代わりとして兄がその役割を果たしていたと考えることができる。第3章のウィリアムの項でジョン・ワーゼンの、「ウィリアムはポールのモデルとなる重要な役だ」という文を引用したが、²⁹ れはなにも話の構成上だけでなく、ウィリアムが同化すべき男としての姿を父に代わって提示していたという意味もあったのだ。ポールとウィリアムに多くの類似点を見つけられるのは、ポールが兄と同じように母から愛されたいがゆえの、当然の結果である。

(2) 死んでいる兄

Sons and Lovers が悲劇だと私が感じるのは、ウィリアムが死んだことだ。ポールは母の愛に渴望して育ち、理想とするのには十分に離れた兄がその愛を一身に受けているのを目の当たりにしてきた。それだけでなく、兄が切り開いていく世界は労働者階級の家族にとって輝かしいものであつたらう。ポールは安心して自分ができる範囲で兄をまねることができたのではないだろうか。その兄が死んでしまった直後にポールもまた病に臥す。そして叫ぶ‘I s'll die, mother!’ (p.171)。このときポールは 16 歳だ。兄と同じように死にそうになって初めて母は自分に注意を向けてくれた。だが、その後はどうすればいいのだろうか？ もう模倣すべき対象はいなくなってしまうのだ。

ロレンス自身は、「自分が母の最愛の息子であった兄のウィリアム・アーネスト (William Ernest) の代わりであり、兄のように母を満足させていないということを自覚していた」³⁰ という。それは

²⁹ SL, Introduction, p. xxii.

³⁰ 橋本宏 『D. H. ロレンス研究——その生涯と作品』、東京：鳳書房、2000、p.47

とても辛い感情なのではないだろうか。そしてその感情を、自身をモデルにしたポールに投影せずにいることなどできなかったであろう。

ちなみに、ウィリアムのモデルとなった実在の兄も「ウィリアム・アーネスト」という名だが、*Sons and Lovers* の一番元になったと考えられる章立てにおいて、「ウィリアム」は *Sons and Lovers* におけるポールの代わりに用いられていた。³¹ そこにウィリアムになりたかったロレンスの思いを見出してしまうのは、行き過ぎであろうか。

5. まとめ

Sons and Lovers というタイトルからも、この作品の母子が恋人同士のように仲が良いということや、単純に「母を愛し、父を憎む」という公式にあてはめてエディプス・コンプレクスのだとする考えは容易に挙げられる。しかし、主人公ポールはエディプス期を迎える前の段階で問題を抱えている。母の愛は償いに根付いており、兄のように情熱的な愛を受ける事のできないまま青年となった。その兄が死んだために、母からの愛をより集中して受けることになっても、ポールが本当に受けたかった愛ではない。——he had never had his life's fulfillment——

Sons and Lovers は決して母から望むべき愛を得る事ができず、また、決して兄を越える事のできなかつた一人の青年の小説でもあるのだ。

³¹ Helen Baron ed., D.H. Lawrence, *Paul Morel*, (Cambridge: Cambridge University, 2003) p.163.

(参考文献)

- Baron, Helen ed., D.H. Lawrence, *Paul Morel*, London: Cambridge university, 2003.
- Boulton, James, T., ed., *The Letters of D. H. Lawrence*, vol.1, Cambridge: Cambridge University Press, 1979.
- Huxley, Aldous, ed., *The Letters of D. H. Lawrence*, London: Heinemann, 1956.
- Lawrence, Ada, & G. Stuart Gelder, *Early Life of D. H. Lawrence*, London: M. Secker, 1932.
- Lawrence, D.H., *Sons and Lovers*, Cambridge: Cambridge University press, 1992.
- Moore, Harry, T., ed., *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, London: Heinemann, 1962.
- Ruderman, Judith, *D. H. Lawrence and the Devouring Mother*, Durham, N.C.: Duke University Press, 1984.
- 井上義夫『ロレンス 存在の闇』、東京：小沢書店、1983。
- ウィドウソン、ピーター『ポスト・モダンの D.H.ロレンス』吉村宏一他訳、東京：松柏社、1997。
- ブラウン、キース『D・H・ロレンス批評地図』、東京：松柏社、2001。
- 大日向雅美『母性の研究』、東京：川島書店、1988。
- 小此木啓吾『シゾイド人間—内なる母子関係をさぐる』、東京：講談社、1984。
- 小此木啓吾・馬場謙一編『フロイト精神分析入門』、東京：有斐閣、1977。
- 長田雅喜編『家族関係の社会心理学』、東京：福村出版、1987。
- 加藤洋介『D・H・ロレンスと退化論』、東京：北星堂書店、2007。
- 木村栄、馬場謙一『母子癒着』、東京：有斐閣、1988。
- シュピッツ、ルネ A『母—子関係のなりたち』古賀行儀訳、東京：同文書院、1965。
- 倉持三郎『D・H・ロレンス』、東京：英潮社新社、1977。
- 小石寛文編『人間関係の発達心理学 3 児童期の人間関係』、東京：培風館、1995。
- 小林登『赤ちゃんの誕生—母と子のきずな—』、東京：岩波書店、1984。
- 佐藤眞子編『人間関係の発達心理学 2 乳幼児期の人間関係』、東京：培風館、1996。
- 田中實『ロレンス文学の愛と性』、東京：鳳書房、2003。
- 西川隆蔵他編『人格発達心理学』、京都：ナカニシヤ出版、2004。
- ノイマン、エリッヒ『グレートマザー』、東京：ナツメ社、1982。
- ノイマン、エリッヒ『意識の起源史』、東京：紀伊国屋書店、2006
- 野口ゆり子『ロレンス 精神の旅路——クリステヴァを通して読む』、東京：彩流社、2002。
- 橋本宏『D.H.ロレンス研究—その生涯と作品』、東京：鳳書房、2000。
- 花沢成一『母性心理学』、東京：医学書院、1992。
- 馬場謙一他編『父親の深層』、東京：有斐閣、1984。
- 藤永保他編『乳幼児心理学』、東京：有斐閣、1978。
- 藤原弘一『D.H.ロレンス——実証的研究——』、大阪：大阪教育図書株式会社、2007。
- フロイト、ジークムント『フロイト 精神分析入門他』菊盛英夫訳、東京：河出書房新社、1972。
- フロイト、ジークムント『精神分析入門 (下)』高橋義孝・下坂幸三訳、東京：新潮社、1977。
- フロイト、ジークムント『エロス論集』中山元訳、東京：筑摩書房、1997。

- フロイト、ジークムント 『自我論集』 中山元訳、東京：筑摩書房、1996。
- フロイト、ジークムント 『フロイト著作集 第5巻』 懸田克躬・高橋義孝他訳、京都：人文書院、1967。
- ポプラウスキー、ポール編 『D.H.ロレンス事典』、東京：鷹書房弓プレス、2002。
- 松尾恒子 『母子関係の臨床心理』、東京：日本評論社、1996。
- 宮本健作 『母と子の絆』、東京：中央公論社、1990。
- ミュッセン、ポール 『児童心理学』、東京：岩波書店、1966。
- 妙木浩之 『エディプス・コンプレックス論争 性をめぐる精神分析史』、東京：講談社、2002。
- 武藤浩史編 『愛と戦いのイギリス文化史』、東京：慶應義塾大学出版会、2007。
- メイシー・クリストファー、フォークナー・フランク 『母となる心理学』 池上千寿子他編、東京：鎌倉書房、1983。
- 山口哲生 『D.H.ロレンスにおける<母>』、東京：鷹書房弓プレス、1989。
- 山田和夫 『エロスなき母子癒着の病理』、東京：大和出版、1988。
- 吉田昌子 「闇の世界への旅立ち」、D. H. ロレンス研究会 『ロレンス研究 3号』、朝日出版社、1980。
- 吉村宏一 『『息子と恋人』における「肉」と「言葉」』、D. H. ロレンス研究会 『ロレンス研究 3号』、東京：松崎印刷朝日出版社、1980。
- ワーゼン、ジョン 『若き日のD・H・ロレンス ケンブリッジ版評伝』、東京：彩流社、1997。